奈良教育大学紀要　第66巻　第１号（人文・社会）平成29年
Bull. Nara Univ. Educ., Vol. 66, No.1 (Cult. & Soc.), 2017

『レディ・スーザン』の矛盾した世界
―ジェイン・オースティンの書き直されなかった小説―

門　田　　守　英語教育講座（英米文学）

The Paradoxical World of *Lady Susan:*
Jane Austen's Novel Which Could Not Be Rewritten

Mamoru KADOTA
(Department of English, Nara University of Education)

Abstract

This essay on Jane Austen's *Lady Susan* examines why this novel has remained in epistolary form except its final chapter. Unlike *Elinor and Marianne* (later *Sense and Sensibility*) and *First Impressions* (later *Pride and Prejudice*), Austen did not rewrite *Lady Susan* as a story narrated in third-person omniscient viewpoint. This choice of narrative form contributed to a vivid presentation of characters and events in the story. However, we should not forget that letters sent from women stick fast to a female point of view which rejects interposition of male characters' conducts and opinions. The paradoxical world of *Lady Susan* partly consists of the eponymous heroine's selfish behaviours. She waywardly decides to marry her daughter to Sir James Martin neglecting her will, opposes her brother-in-law's marrying Catherine Vernon though in vain, and tries to separate Mr. Manwaring from his wife to live a happy life with him. Lady Susan, in committing these reckless deeds, shows an increasing resemblance to a female patriarch who tries to preside over the destinies of the people around her. I would not use the word matriarch, because she conducts herself as an unacknowledged ruler of the society. Her efforts to make amorous approaches to Mr. De Courcy, when she still keeps being on intimate terms with Mr. Manwaring, bears testimony to her inclination to regard her lovers as personal properties. The heroine of an insecure social standing as an unpropertied widow, an inevitable victim of patriarchy, holds sway over the men around her, taking advantage of her voluptuous grace and brilliant intelligence. This apparent contradiction that a victim of patriarchy lends a hand in consolidating the social system makes *Lady Susan* a unique and ironical story. Austen chose to write only the final part of the novel in the third person. This narrative strategy, I wish to argue, helps Austen close the novel without having to lapse into an in-depth description of Lady Susan's marriage with Sir James, her least favourite partner. This ending may reflect Austen's conservative attitude as a novelist, but it also keeps the heroine's unwomanly character intact.

キーワード：ジェイン・オースティン，『レディ・スーザン』，家父長制，ピカロ，ヒロイン

Key Words：Jane Austen, *Lady Susan*, patriarchy, picaro, heroine

１．はじめに

ジェイン・オースティン（Jane Austen, 1775-1817）の『レディ・スーザン（*Lady Susan*, 1871）は，彼女の完成に至った唯一の中編小説である。他の中編小説に『ワトソン家の人々』（*The Watsons*, 1871）と『サンディトン』（*Sanditon*, 1871）があるが，いずれも未完成のままでオースティンは世を去っている。前者は財産家の伊達男トム・マスグレイヴ（Tom Musgrave）と貴族の令息サー・オズボーン（Sir Osborne）の求愛を退け，実直な牧師ハワード氏（Mr. Howard）の愛を選ぶヒロインのエマ・ワトソン（Emma Watson）の姿を描いて

いる。後者は海浜の小村サンディトンを訪れたヒロインのシャーロット・ヘイウッド（Charlotte Heywood）が，同地の開発を目論むパーカー氏（Mr. Parker）とレディ・デナム（Lady Denham）の強欲ぶりに出くわし，彼らを取り巻く連中の身勝手な生態を観察するという内容になっている。シャーロットが唯一心を許せるのは，レディ・デナムの貧しくも美しい姪クララ・ブリアトン（Clara Brereton）だけである。『レディ・スーザン』が1794年頃，オースティンが19歳のときに書かれた初期作品であるのに対し，『ワトソン家の人々』の執筆年代は1804年から1807年の脂がのりきった時期，『サンディトン』のそれは1817年の最晩年に属すると言えよう。また，『レディ・スーザン』がオースティンのいわゆる初期作品群（juvenilia）に見られる書簡体形式で書かれているのに対し，後者の二作品はいずれも三人称単数の語りの形式で書かれている。(1) こうした点から見て，『レディ・スーザン』は同じ中編小説であるとはいえ，これらとは独立して論じられるべき作品であろう。

『レディ・スーザン』は書簡体小説のままでとどまり，最後まで改筆されることはなかった。(2) オースティンの当時の執筆事情を考えると，このことは不思議ではないであろうか。実は，この作品が執筆された翌年1795年には，オースティンは後に『分別と多感』（*Sense and Sensibility*, 1811）に改筆される原作品である『エリナとメアリアン』（*Elinor and Marianne*）を執筆している。さらに，1796年から1797年にかけては，彼女は後に『高慢と偏見』（*Pride and Prejudice*, 1813）に改筆される原作品である『第一印象』（*First Impressions*）を執筆している。そして，『エリナとメアリアン』と『第一印象』はもともと書簡体で書かれ，後にそれぞれ端正な三人称単数の語りの形式に彫琢を施されたのである。(3) 『レディ・スーザン』もまた，書簡体小説である。しかしながら，なぜ近接した時期に執筆され，ある程度のまとまった長さを持つにもかかわらず，『レディ・スーザン』のみが書簡体のまま，手つかずで残されたのであろうか。そこには，なんらかの理由があるに違いない。『レディ・スーザン』は構造と人物造型の両面で，矛盾に満ち溢れた作品である。その矛盾こそが，敢えてこの作品を書簡体小説として取り残した理由ではないであろうか。

オースティンにとって，書簡体小説とは例外的な存在である。書簡体小説としては，初期作品群の一つ『愛と友情』（*Love and Freindship*, 1922）が知られている。スペリングが“*Friendship*”ではなく，“*Freindship*”であるのは，この作品を執筆した1790年当時のオースティンの特徴である。しかしながら，これはヒロインのローラ（Laura）とエドワード・リンジー（Edward Lindsay）の恋物語にヒロインの奇想天外な旅物語が折り重なった，いかにも若書きの小説であり，出来映えとしてけっして優れたものではない。この他に，オースティンの書簡体小説としては，未完成の短編小説「レズリー城」（“Lesley Castle,” 1922）があるくらいである。これは女性登場人物の一人マーガレット・レズリー嬢（Miss Margaret Lesley）が不幸な結婚をした兄，さらに遊蕩癖のある父の生活について悩む様子など，心理描写面に優れた部分があるとはいえ，やはり完成度としては低いと言わざるを得ない。オースティンにとって，書簡体小説は三人称単数の語りの形式に高められてこそ，価値が出てくる執筆様式なのである。

さて，『レディ・スーザン』を書簡体形式で書かれながらも，魅力的な作品にしている矛盾とはどのようなものであろうか。構造面から見ると，この作品は奔放なレディ・スーザンと保守的なヴァーノン夫人（Mrs. Vernon）の対決といった様相を帯びる。万が一，オースティンがこの作品を三人称単数の語りの形式に書き換えたとすれば，おそらくこの二人の対立構造を主軸に据えたに違いない。そして，本来ならば思春期の娘を連れた，けっして経済的に豊かではない，寄る辺ない身の上の中年女レディ・スーザンが実に猛々しく男を漁り，ヴァーノン家を危機に陥れるのである。(4) レディ・スーザンはヴァーノン家を攻め続けるのだ。この攻撃に対し，ヴァーノン夫人の振る舞いは防御一辺倒といった様子である。彼女は弟のレジナルド・ド・カーシィ（Reginald De Courcy）だけは奪われまいと，必死になって立ち回る。レジナルドは小説中，ド・カーシィ氏（Mr. De Courcy）とも呼ばれている。普通の状況であれば，ヴァーノン家が可哀想な身の上のレディ・スーザンを助けなければならないのではないであろうか。この構造上の矛盾が作品のバックボーンとなり，独特の効果をもたらしている。

人物造型の面でも，この作品は種々の矛盾を孕んでいる。たとえば，当然ながら，レディ・スーザンが精力的に動き回りすぎるのは，夫を亡くして四ヶ月目の未亡人にしては，社会的立場上，きわめて不可思議なものに見えてくる。彼女は30代半ばという年齢設定にされている。コンダクト・ブックスにあるような，中年女性に期待される振る舞いをことごとく，レディ・スーザンは裏切っている。また，身分の高い女性に相応しい振る舞いも，彼女はすべて拒絶している。オースティン小説に期待される道徳的振る舞いの推奨などは，彼女の人物造型にまったく見ることができない。(5)

ヴァーノン夫人の人物造型にも矛盾点が認められる。彼女はヴァーノン家の出ではなく，ド・カーシィ家の出である。彼女の本名はキャサリン・ヴァーノン（Catherine Vernon）であり，レディ・スーザンの義理の妹に当たる。レディ・スーザンの本名はレディ・スーザン・ヴァーノンである。ヴァーノン夫人は結婚して，ヴァーノン姓を

名乗っているが，当然ながらヴァーノン家と血の繋がりがあるわけではない。保守的なド・カーシィ家の家風をまるごと背負ったような女性なのだ。夫のチャールズ・ヴァーノン（Charles Vernon）と結婚する際には，ひどくレディ・スーザンに反対された。チャールズはレディ・スーザンの義理の弟に当たる。おそらく，レディ・スーザンの持つヴァーノン家的な不道徳に傾く性格が，ド・カーシィ家の娘の生真面目さを嫌ったのであろう。この結婚をめぐる対立のゆえに，ヴァーノン夫人とレディ・スーザンは犬猿の仲である。しかしながら，不思議なことに，ヴァーノン夫人はレディ・スーザンの十代半ばの娘フレデリカ（Frederica）をなぜかひどく可愛がるのだ。レディ・スーザンが娘になんの愛情もかけないのに比べ，ヴァーノン夫人は彼女を代理母のように救ってやろうとする。あまつさえ，ヴァーノン夫人はけっして出来のよくないフレデリカを，実の弟のド・カーシィ氏と結婚させようとさえする。奇妙ではあるが，これはレディ・スーザンが自分にしたことの裏返しを，ヴァーノン夫人がしていることを表していると言えないであろうか。水と油のように異なる両家の家風を背景に，レディ・スーザンは義理の弟の結婚に反対し，ヴァーノン夫人は実の弟の結婚に賛成する。前者の結婚ではレディ・スーザンは立派な娘キャサリン（ヴァーノン夫人のこと）を一家に招くことに反対し，後者の結婚ではヴァーノン夫人は困り者の娘フレデリカを一家に受け入れることに賛成する。ヴァーノン夫人は，敢えて自分に不利な家族関係を招いているように見える。これは矛盾した振る舞いと言えないであろうか。

矛盾した人物造型は，この小説の男たちにも見受けられる。基本的に男たちは何もしない。ヴァーノン夫人の夫は銀行家である。彼の本名はチャールズ・ヴァーノン（Charles Vernon）であり，レディ・スーザンの死んだ夫の弟に当たる。ということは，彼は曲がりなりにもヴァーノン家の当主なのだ。しかし，彼はレディ・スーザンを経済的に保護しようという姿勢をまったく見せない。逆に，レディ・スーザンの方で，ヴァーノン城の彼への売却を断っている。レディ・スーザンの無二の親友に，アリシア・ジョンソン（Alicia Johnson）という中年女性がいる。レディ・スーザンに負けず劣らず，不道徳な女性であるが，彼女の夫がジョンソン氏である。このジョンソン氏はマナリング夫人（Mrs. Manwaring）という女性の後見人になっている。そして，レディ・スーザンが彼女の夫のマナリング氏に手を出しても，ジョンソン氏はマナリング夫人を守ったり，彼女の身を案じたりする素振りをまったく見せない。このように，男性の登場人物たちは，果たすべき役割を果たさず，通常期待されるのとは矛盾した態度を示すと言えないであろうか。

こうした，まるで箍（たが）が外れたような世界を『レディ・スーザン』という小説は描いている。では，なぜオースティンは本来ならば彼女の作風に合わない，こんな矛盾に溢れた小説を書いてみようとしたのであろうか。そして，なぜこの小説は三人称単数の語りの形式に改筆されなかったのであろうか。このような問題について焦点を絞り，レディ・スーザンの動きを追いながら考察してみたい。

2．書簡のやりとりの特徴

まず，『レディ・スーザン』は書簡のやりとりに一定の特徴があるように見える。以後の考察を行うのに便利であるため，最初に書簡のやりとりについてまとめてみよう。括弧内には，各書簡の簡単な説明を添えている。サー・ジェイムズ・マーティン（Sir James Martin）はマナリング嬢の恋人，マナリング嬢はマライア・マナリング（Maria Manwaring）とも呼ばれるマナリング家の長女，ド・カーシィ令夫人（Lady De Courcy）はヴァーノン夫人の母である。

書簡１：レディ・スーザンからヴァーノン氏へ
（挨拶状，娘をロンドンの学校に上げると言う。）
書簡２：レディ・スーザンからジョンソン夫人へ
（マナリング氏への恋の攻撃を告げる。）
書簡３：ヴァーノン夫人からド・カーシィ令夫人へ
（レディ・スーザンへの警戒心を示す。）
書簡４：ド・カーシィ氏からヴァーノン夫人へ
（レディ・スーザンはマナリング氏を誘惑していると言う。）
書簡５：レディ・スーザンからジョンソン夫人へ
（ヴァーノン家の財産を狙うと言う。）
書簡６：ヴァーノン夫人からド・カーシィ氏へ
（レディ・スーザンに警戒せよと告げる。）
書簡７：レディ・スーザンからジョンソン夫人へ
（フレデリカをサー・ジェイムズに嫁がせる意思を表明する。）
書簡８：ヴァーノン夫人からド・カーシィ令夫人へ
（レディ・スーザンの人間性を貶している。）
書簡９：ジョンソン夫人からレディ・スーザンへ
（ド・カーシィ氏を口説き落とすことを勧める。）
書簡10：レディ・スーザンからジョンソン夫人へ
（今のところ，本命はマナリング氏だと宣言する。）
書簡11：ヴァーノン夫人からド・カーシィ令夫人へ
（レディ・スーザンがサー・ジェイムズを誘惑していると告げる。）
書簡12：サー・レジナルド・ド・カーシィから息子へ
（レディ・スーザンに気をつけるよう諭す。）
書簡13：ド・カーシィ令夫人からヴァーノン夫人へ

（息子がレディ・スーザンに夢中だと知らせる。）
書簡14：ド・カーシィ氏からサー・ド・カーシィ氏へ
（父にレディ・スーザンは悪人でないと告げる。）
書簡15：ヴァーノン夫人からド・カーシィ令夫人へ
（ヴァーノン嬢の未遂事件について連絡する。）
書簡16：レディ・スーザンからジョンソン夫人へ
（娘について心配せず，マナリング氏の魅力を語る。）
書簡17：ヴァーノン夫人からド・カーシィ令夫人へ
（フレデリカを家に迎え入れたと告げる。）
書簡18：同一人物から同一人物へ
（フレデリカが弟に好意を持っていると告げる。）
書簡19：レディ・スーザンからジョンソン夫人へ
（娘がド・カーシィ氏に夢中だと嘆く。）
書簡20：ヴァーノン夫人からド・カーシィ令夫人へ
（サー・ジェイムズの到来とフレデリカの動揺を伝える。）
書簡21：ヴァーノン嬢からド・カーシィ氏へ
（サー・ジェイムズを追い払って欲しいと依頼する。）
書簡22：レディ・スーザンからジョンソン夫人へ
（サー・ジェイムズこそ娘に相応しいと言う。）
書簡23：ヴァーノン夫人からド・カーシィ令夫人へ
（弟がフレデリカに好意を抱いていると告げる。）
書簡24：同一人物から同一人物へ
（弟がレディ・スーザンの色香に迷っていると嘆く。）
書簡25：レディ・スーザンからジョンソン夫人へ
（娘をサー・ジェイムズに嫁がせると言う。）
書簡26：ジョンソン夫人からレディ・スーザンへ
（ド・カーシィ氏を諦めるなと進言する。）
書簡27：ヴァーノン夫人からド・カーシィ令夫人へ
（母の与えるフレデリカへの悪影響を懸念する。）
書簡28：ジョンソン夫人からレディ・スーザンへ
（夫が痛風でロンドンに留まることを託つ。）
書簡29：レディ・スーザンからジョンソン夫人へ
（自分の本命はド・カーシィ氏ではなくマナリング氏だと告げる。）
書簡30：レディ・スーザンからド・カーシィ氏へ
（さりげなくド・カーシィ氏からの求愛を断る。）
書簡31：レディ・スーザンからジョンソン夫人へ
（ド・カーシィ氏のロンドン滞在が疎ましいと言う。）
書簡32：ジョンソン夫人からレディ・スーザンへ
（マナリング氏がド・カーシィ氏に会い，レディ・スーザンの恋の火遊びがばれたと告げる。）
書簡33：レディ・スーザンからジョンソン夫人へ
（マナリング氏の誘惑に失敗したことを悔しがる。）
書簡34：ド・カーシィ氏からレディ・スーザンへ
（レディ・スーザンに分かれようと言う。）
書簡35：レディ・スーザンからド・カーシィ氏へ
（ド・カーシィ氏との関係修復を試みる。）
書簡36：ド・カーシィ氏からレディ・スーザンへ
（レディ・スーザンがマナリング夫人を苦しめていたことを非難する。）
書簡37：レディ・スーザンからド・カーシィ氏へ
（ド・カーシィ氏を諦めたと告げる。）
書簡38：ジョンソン夫人からレディ・スーザンへ
（マナリング夫妻の離縁，マナリング嬢がサー・ジェイムズとの関係修復を狙っていると告げる。）
書簡39：レディ・スーザンからジョンソン夫人へ
（自分とマナリング氏との親密な関係，娘をサー・ジェイムズに嫁がせる意思を開陳する。）
書簡40：ド・カーシィ令夫人からヴァーノン夫人へ
（レディ・スーザンとの関係断絶を告げるために，ド・カーシィ氏が帰還したと告げる。）
書簡41：ヴァーノン夫人からド・カーシィ令夫人へ
（レディ・スーザンが娘を連れ戻しに来たと告げる。）
結び：三人称単数の語りの形式
（ヴァーノン夫人のフレデリカへの愛情，レディ・スーザンとサー・ジェイムズとの結婚，フレデリカとド・カーシィ氏の愛の関係修復を語る。）

以上，全部で41通の書簡がやりとりされているのであるが，それらを分類するとこのようになる。

レディ・スーザンからの書簡全16通（うちジョンソン夫人宛12通，ド･カーシィ氏宛３通，ヴァーノン氏宛1通）

ヴァーノン夫人からの書簡全12通（うちド・カーシィ令夫人宛11通，ド・カーシィ氏宛１通）

ジョンソン夫人からの書簡全５通(すべてレディ･スーザン宛)

ド・カーシィ氏からの書簡全４通（うちレディ・スーザン宛２通，ヴァーノン夫人宛1通，サー・ド・カーシィ氏宛1通）

ド・カーシィ令夫人からの書簡全2通（すべてヴァーノン夫人宛）

サー・ド・カーシィ氏からの書簡全1通（ド・カーシィ氏宛）

ヴァーノン嬢からの書簡全1通（ド・カーシィ氏宛）

これらの書簡のやりとりからわかるように，ほとんどの書簡がレディ・スーザンとジョンソン夫人の間（合計17通）と，ヴァーノン夫人とド･カーシィ令夫人の間（合計13通）で取り交わされている。秩序破壊型の前者のやりとりと，秩序維持型の後者のやりとりが構造的に対立していることが容易にわかるであろう。

また，基本的にレディ・スーザンとジョンソン夫人の

やりとりと，ヴァーノン夫人とド・カーシィ令夫人のやりとりが交互に行われるようになっており，他の登場人物の書簡はそれらに挟み込まれるようになっている。そしてジョンソン夫人はレディ・スーザンの，ド・カーシィ令夫人はヴァーノン夫人の助言者の立場であるため，結局はレディ・スーザンの引き起こす混乱をヴァーノン夫人が修復するという形で，小説のプロットは進んでいく。

面白いのは，最後だけが，作者が語りに介入した三人称単数の語りの形式になっていることである。プロット展開を結末へと導くのに，オースティンは書簡のやりとりだけで終えることができなかった，あるいは意図的にそうしなかったのである。なぜ，オースティンはこのような終わり方を選んだのであろうか。複雑な書簡のやりとりの執筆は神経をすり減らす作業であろうから，彼女の息が最後まで続かなかったのかもしれない。しかし，これは作家の技量に小説形態を還元してしまう，信憑性を欠く判断であるように思われる。オースティンにその技量があったのかもしれず，なかったのかもしれないからだ。結論はどちらにもなりうるのである。最後が三人称単数の語りの形式になった理由は，是非とも小説の内部から導き出さなければならない。このことは，後の章で考察することにしよう。

もう一つ，最後が三人称単数の語りの形式になったことは，『エリナとメアリアン』と『第一印象』が書簡形式から三人称単数の語りの形式に改筆されたことと平行して，もともとオースティンには書簡形式から三人称単数へと執筆過程を進める傾向があったことを証しているように思われる。最後の部分を三人称単数の語りの形式にすることで，『レディ・スーザン』の全体をこの語りの形式に見直すという思いが，作家の脳裏をよぎらなかったとは言えないであろう。書簡形式の語りは，その書簡ごとに語りの視点が変化する。その書簡を書いている人物に，語りの視点が移動してしまう。作家が何かものを言いたい場合，書簡の執筆者を通してしかそれができず，隔靴掻痒の思いを生むことになってしまう。したがって，一定の立場から状況にコメント加えるという，三人称単数の語りが持つ利便性を逸してしまうことになる。さらに，モラル性などの一定の主張を作品に込めるという利点も，作家はやりにくくなってしまう。これらは，作家が直接的に読者に語りかけることが可能な三人称単数の語りの形式が持つ特性である。徐々に自らの作家としての主張が固まっていくにつれて，三人称単数の語りの形式が選び取られていくことは当然のことではないであろうか。

ところが，三人称単数の語りに移動すると，作家は何らかの主張を作品に持ち込まなければならないという責任を負うということも，逆に言えるのではないであろうか。『レディ・スーザン』にしっかりとした主張を込めるとするならば，どんな主張が選び取られるべきであろうか。この作品の持つ人物関係のネットワークは，その主張を支えきれるほどに練り上げられたものであろうか。こういったことを，作品を展開する力を付与されたレディ・スーザンの動きを追いつつ見ていくことにしよう。

3．レディ・スーザンはマナリング家を狙う

おそらく，『レディ・スーザン』はオースティンにとって，鬼っ子のような小説であると言えよう。そこがこの小説の魅力でもあろうが，通常のオースティンの世界において期待される，種々の美徳，たとえば忍耐，滅私，洞察，成長などはまったく姿を見せない。敢えて，邪悪な女ピカロであるレディ・スーザンを，作品中において自由に泳がせると仮定して，起こってくる事態を楽しむという雰囲気が漂うのである。

レディ・スーザンが最初に狙うのは，マナリング家の家人とその関係者である。しっかりとした計算がその裏側には認められる。レディ・スーザン自身はマナリング氏を狙っている。彼に白羽の矢が立った理由は，単に彼が楽しく魅力的な人物であったからである。彼には当然ながら妻がおり，彼を狙う行為は歴とした略奪愛である。マナリング夫人は恐ろしく怒り狂うであろう。その場合の対処法はこのとおりである。レディ・スーザンはジョンソン夫人宛の書簡でこう言っている。

> Sir James is gone, Maria highly incensed, and Mrs. Manwaring insupportably jealous; so jealous in short, and so enraged against me, that in the fury of her temper I should not be surprised at her appealing to her Guardian if she had the liberty of addressing him—but there your Husband stands my friend, and the kindest, most amiable action of his Life was his throwing her off forever on her Marriage. (Letter 2, 208-9)[6]

マナリング夫人が文句を言っても，彼女の後見人のジョンソン氏がなんとかして事を丸めてくれるという見通しが，レディ・スーザンにはあるのだ。あまつさえ，娘のフレデリカにはサー・ジェイムズをあてがおうとする意思がレディ・スーザンにはある。しかしながら，娘がひどくサー・ジェイムズを毛嫌いしているものだから，目下のところ，彼には手をつけないでおこうとする。しかしながら，この裏にはさらに鼻持ちならない意思が息づいている。もしも，マナリング氏を落とし損ねたならば，今度はサー・ジェイムズを自分で口説いてみようという計画をレディ・スーザンは持っているのだ。つまり，サー・ジェイムズは娘の相手として決めつける前に，自分にとっての恋愛の第二候補として保持しておく方が得

策というわけなのだ。

レディ・スーザンの考えていることは，もちろんきわめて邪悪である。しかしながら，彼女の意思が書簡形式を用いることによって，ある程度作者自身の意思から遊離して開陳されている点に注目しなければならない。また，レディ・スーザンはジョンソン夫人とのプライベートな書簡のやりとりという空間で，自分の赤裸々な思いを自由自在に披露できるのである。親密な間柄の女たちの書簡の自由な取り交わしによって，読者がその内容に判断を下す前に，あっという間に小説のプロットは進行していく。作者の責任回避と読者の判断停止が，書簡形式の語りの構造によって可能になっているのだ。

当然ながら，ヴァーノン夫人はレディ・スーザンのこうした振る舞いを察知し，自家にその影響が及ぶことを懸念する。この性悪女はヴァーノン夫人の住むチャーチル（Churchill）を訪れると言うのだ。ヴァーノン夫人以上にレディ・スーザンの行状に眉を顰めているのは，ド・カーシィ氏である。マナリング家のあるラングフォード（Langford）における，レディ・スーザンの傍若無人な振る舞いを知るに及び，彼の警戒心は急速に高まっていく。ド・カーシィ氏はヴァーノン夫人の実家パークランズ（Parklands）から書簡を寄越している。ド・カーシィ家の血筋の人間たちの秩序を志向する思いと，ヴァーノン家の秩序破壊，あるいはそのプロセスの放置を行う傾向が早くも対立を見せている。

両家の対立を背景にして，ヴァーノン夫人がド・カーシィ家の血を引きながらも，ヴァーノン姓を名乗っていることが事情を複雑にしている。彼女は二つの家の両方に責任を持つ微妙な立場にあることを忘れてはならない。夫のヴァーノン氏は家のことに口出しをせず，銀行業に専念している。しかも，彼は義理の姉たるレディ・スーザンには頭が上がらない。ヴァーノン夫人はヴァーノン家の人間の行動には，母のド・カーシィ令夫人の助言を仰ぎながら対処するしかない。つまり，ヴァーノン夫人はド・カーシィ家の流儀で，ヴァーノン家の不道徳を匡正していく立場にいるのである。両家の道徳と不道徳のぶつかり合う重要な位置にヴァーノン夫人はおり，彼女は小説中第二のヒロインとも呼べる人物となっているのだ。

レディ・スーザンは明らかに，ヴァーノン家の支配を目論んでいる。経済的にではない。経済的にはヴァーノン氏の優位性は不変のものである。レディ・スーザンの企みは，情緒的にヴァーノン家の面々を自分の自由にできる存在にしてしまおうというものである。彼女はジョンソン夫人にこう書き送っている。

> I mean to win my Sister-in-law's heart through her Children; I know all their names already, and am going to attach myself with the greatest sensibility to one in particular, a young Frederic, whom I take on my laps and sigh over for his dear Uncle's sake. (Letter 5, 213)

「彼（フレデリック坊や）の愛しい叔父」とは，もちろんレディ・スーザンの死んだ夫のことである。と言っても，レディ・スーザンには真剣に夫のことを懐かしがる気はないようだ。理由は，この直後に彼女はマナリング氏の心を掴んだ勝利を，誇らしくもジョンソン夫人に報告しているからである。

> Poor Manwaring!—I need not tell you how much I miss him—how perpetually he is in my Thoughts. I found a dismal letter from him on my arrival here, full of complaints of his wife and sister, and lamentations on the cruelty of his fate. (Letter 5, 213)

夫を失って四ヶ月後に，レディ・スーザンはマナリング氏に乗り換え，なんら良心の呵責を感じていないのである。経済的に足元はぐらついているにもかかわらず，レディ・スーザンは持ち前の美貌と利発さで，狙った獲物の男は逃さない。彼女の魔力は，ひたすらに男たちの情緒を捕らえ込んでしまうのだ。

ヴァーノン夫人でさえ，しっかりと構えていなければ，レディ・スーザンの魔力に捕らえ込まれそうになる。うかつにレディ・スーザンに対峙していると，ヴァーノン夫人は彼女が友人であるかのように感じてしまう。

> Her [Lady Susan's] address to me was so gentle, frank, and even affectionate, that if I had not known how much she has always disliked me for marrying Mr. Vernon, and that we had never met before, I should have imagined her an attached friend. (Letter 6, 214)

レディ・スーザンは正反対の人物であるヴァーノン夫人の心さえ蕩けさすほどに，魅力に満ちた女性なのである。

ヴァーノン夫人の見解では25歳以上には見えないこの中年女性レディ・スーザンは，いったいマナリング家に対し何を望んでいるのであろうか。それは女・家父長として振る舞うことなのである。[(7)] 彼女は娘のフレデリカに対して，自ら教育が至らなかったことをヴァーノン夫人に告げている。しかしながら，彼女は娘の教育には何の興味も示さず，娘の家庭教師や召使い選びもぞんざいであり，娘を田舎のスタッフォードシャー（Staffordshire）に置き去りにして，自分は好き放題に振る舞っている。

いざ，フレデリカに教育を施すことが必要になったとき，レディ・スーザンは彼女をロンドンで一番の私立校に通わせることにする。これはサマーズ嬢（Miss Summers）の経営する学校である。ただし，レディ・スーザンはジョンソン夫人に対して，フレデリカにはフランス

語，イタリア語，ドイツ語，音楽，歌唱，絵画を習わせるよりも，振る舞いの優雅さと礼儀作法を学ばせるだけで十分であると言う。彼女の次の言葉は，実に利己的と言わねばならない。

> I do not mean therefore that Frederica's acquirements should be more than superficial, and I flatter myself that she will not remain long enough at school to understand anything thoroughly. I hope to see her the wife of Sir James within a twelve-month. (Letter 7, 216)

レディ・スーザンは娘をマナリング氏の妹，マナリング嬢の恋人サー・ジェイムズ・マーティンに嫁がせる存在としか考えていない。サー・ジェイムズは大変な資産家の息子である。いわば，フレデリカはレディ・スーザンにとって資産家の庇護に預かるための道具に過ぎないのだ。そして，レディ・スーザン自身はマナリング家の正妻の地位に就くべく，せっせとマナリング氏を口説き落とすのに余念がない。マナリング氏にはもちろん妻がいる。彼の妻マナリング夫人が激怒するのも無理はない。しかしながら，レディ・スーザンはそんなことは意に介さない。彼女はマナリング夫人を蹴落として，妻の座を射止めようとする。マナリング氏を骨抜きにし，自分の奴隷としてしまうレディ・スーザンは，いわば家父長の座に居座ろうとするのではないであろうか。

女性が家父長にはなれないのは当然のことである。しかしながら，レディ・スーザンの男漁りの行動は，彼女をめぐる家族関係への作用面において，家父長制のそれをなぞっているように思えてならない。[8] 彼女がマナリング氏の心を射止め，彼の正妻になるとしよう。そうすれば，妻のマナリング夫人は家庭から追い出されてしまうことになる。この妻を一方的に離縁できる権利は，家父長にのみ認められた権利に他ならない。マナリング氏の心は，とうの昔に夫人から離れてしまっている。その原因がレディ・スーザンであることは間違いない。しかしながら，美貌や知性の点でレディ・スーザンはマナリング夫人を凌駕している。マナリング夫人の取り柄は父親が資産家であることだけである。マナリング氏にそんな妻を離縁させる点で，いわばレディ・スーザンは自分が揮いたい家父長の権力を，彼を代理として揮っているのである。

フレデリカとサー・ジェイムズとの縁談にしても，これはもちろん本来は家父長にのみ帰属する権力である。父親は娘の嫁ぎ先を自由に選ぶことができる。レディ・スーザンはフレデリカを無理矢理マーティン家に嫁がせようとすることで，家父長の権力をいわば模倣的に行使しているのである。マナリング氏自身はさしたる財産を持っていない。しかし，マーティン家は資産家である。自分は我が儘を通し，陽気で自分の気に入ったマナリング氏と楽しく暮らそうとする。[9] その一方で資産家との縁を，娘を介して得ようとする。これは家父長の行動のまねびとは言えないであろうか。

凄まじいことに，レディ・スーザンはサー・ジェイムズにも媚態を見せつけ，手に入れようとさえしている。娘に分け与える男を，いざとなったら我が物とすることを彼女は厭わない。まさに女性ピカロ（悪漢）としての本領発揮である。しかしながら，サー・ジェイムズはマナリング氏と比べて，凡庸でつまらない男である。いざ，マナリング氏との再婚がままならなくなったときの安全性を担保するために，気が進まないサー・ジェイムズであっても手をつけておく必要があったのだ。

レディ・スーザンはマナリング家を，いわば乗っ取りに来るのである。彼女はマナリング氏を通して，家父長の権力を揮おうとしているのである。

4．レディ・スーザンのヴァーノン家への恨み

レディ・スーザンはラングフォードのマナリング家から，チャーチルのヴァーノン家へと向かう。ヴァーノン夫人は招かれざる客の到来に恐れおののいている。マナリング家の家族関係が，レディ・スーザンの長逗留によって崩壊の危機に瀕していることは，ヴァーノン夫人の耳にも届いている。ヴァーノン夫人が恐れているのは，実家の弟ド・カーシィ氏がレディ・スーザンによって誑かされることである。[10] ド・カーシィ氏は一時的に実家のド・カーシィ家を離れ，ヴァーノン家に滞在しているのである。ヴァーノン夫人は母親ド・カーシィ令夫人宛ての書簡において，レディ・スーザンへの嫌悪感をこう述べている。

> Lady Susan has certainly contrived in the space of a fortnight to make my Brother like her. In short, I am persuaded that his continuing here beyond the time originally fixed for his return, is occasioned as much by a degree of fascination towards her, as by the wish of hunting with Mr. Vernon, and of course I cannot receive that pleasure from the length of his visit which my brother's company would otherwise give me. I am indeed provoked at the artifice of this unprincipled Woman. (Letter 8, 217-18)

ド・カーシィ氏は姉の屋敷にやって来たとき，レディ・スーザンの誘惑にはしっかりと抵抗する覚悟でいた。しかしながら，蓋を開けてみれば，彼の抵抗は瞬く間に消えてしまい，彼はレディ・スーザンの熱烈な讃美者となってしまう。

レディ・スーザンがヴァーノン家を，とりわけヴァーノン夫人を恨むのにはちゃんとした理由があった。夫が亡くなった後，レディ・スーザンは弟のチャールズ・

ヴァーノンがド・カーシィ家の長女キャサリン・ヴァーノンと結婚するのに反対した。レディ・スーザンは弟に結婚せずに，ヴァーノン城に留まってもらい，フレデリカと共に暮らしたかったのである。つまり，ヴァーノン城という家を維持し，それを支配する家父長としての地位を保持したかったのである。弟は勤勉な銀行家でしっかりとした財を成している。弟は何事につけ，レディ・スーザンの言いなりである。ところが，結婚を決めるという大事なときになって，彼は姉の言うことを聞かず，キャサリン・ヴァーノンとの縁組みを認めてしまった。これは城を中心とした家父長が支配する構造を破壊する行為であった。これに怒ったレディ・スーザンは，ヴァーノン家の破壊を目論んで，少なくともヴァーノン夫人に一泡吹かせるつもりで，チャーチルに乗り込んでくるのである。

レディ・スーザンが経済的理由からヴァーノン城を売り飛ばす必要に迫られたときも，彼女はけっして城をヴァーノン氏に売ろうとはしなかった。赤の他人の手に渡るのは致し方ないとしても，城が弟夫婦の手に渡る屈辱だけには耐えがたかったのである。弟夫婦が城を自分たちの空間として占有し，その中で家庭生活を営むことは，レディ・スーザンにとっては自分の地位を嫌なヴァーノン夫人に明け渡す行為に等しかった。城の中で維持してきた女・家父長としての地位は失墜し，それはただの中産階級に属する銀行家の妻の地位に変わってしまうのである。これはレディ・スーザンにとっては，是が非でも避けねばならない事態であった。

レディ・スーザンの復讐は用意周到にド・カーシィ氏を誘惑し，彼を我が物とすることによって果たされる。これはヴァーノン夫人の鼻を明かす行為であると同時に，ド・カーシィ家の経済的優位性を失墜させる行為であった。ヴァーノン家の経済的優位性は，ヴァーノン氏が勤勉に銀行業に精出している限り揺るがない。レディ・スーザンも弟の家業を邪魔し，彼の家の経済生活を破綻に陥れる気はない。キャサリン・ヴァーノンを嫁にもらったとはいえ，ヴァーノン氏はレディ・スーザンにとって可愛い義理の弟なのだ。ところが，とりわけ憎きヴァーノン夫人に最も堪えるのは，裕福なド・カーシィ家の跡取り息子である弟ド・カーシィ氏がレディ・スーザンの手に落ちることである。これはド・カーシィ家の家名が地に落ち，その経済的優位性が揺るがされることを意味している。ド・カーシィ氏の父サー・ド・カーシィ氏はこのことに気づいており，息子にこのように書簡を送っている。

> It is possible her behaviour may arise only from Vanity, or the wish of gaining the admiration of a Man whom she must imagine to be particularly prejudiced against her; but it is more likely that she should aim at something further. She is poor, and may naturally seek an alliance which must be advantageous to herself. You know your own rights, and that it is out of my power to prevent your inheriting the family Estate. (Letter 12, 223)

ド・カーシィ家の財産は，やがていつかは確実にド・カーシィ氏によって相続される。彼の父は老体で，老い先短い身の上である。そして，ド・カーシィ氏が口八丁手八丁なレディ・スーザンの言いなりになるのも，確実に予想されることである。そうしてみれば，レディ・スーザンがド・カーシィ家の財産を手に入れたに等しいということになる。これはヴァーノン夫人にとって致命的な一撃ではないであろうか。そして，レディ・スーザンが可愛い弟ド・カーシィ氏を落とす行為が，ヴァーノン家において，自分の目の前で行われているのである。これは，ヴァーノン夫人に対する残酷な復讐行為以外の何物でもないであろう。

ド・カーシィ氏は12歳も年上の，レディ・スーザンの色香にすっかり参っている。すっかり骨抜きにされた彼は，感性が優れた女性との語らいを楽しんでいるだけだと，父親宛の書簡に書いている。あまつさえ，肝心要のレディ・スーザンがヴァーノン夫妻の結婚に反対したことについては，ド・カーシィ氏は完全に前者の肩を持つ側に回ってしまっている。

> From an attachment to her husband which in itself does honour to both, she cannot forgive the endeavours at preventing their union, which have been attributed to selfishness in Lady Susan. But in this case, as well as in many others, the World has most grossly injured that Lady, by supposing the worst, where the motives of her conduct have been doubtful. (Letter 14, 226)

ド・カーシィ氏はレディ・スーザンが姉の結婚に反対した理由については，よく理解していない。ただ単に，それを利己心のせいにしてはならないと述べているだけなのである。ド・カーシィ氏自身が理由もわからず，レディ・スーザンを弁護しているのである。

レディ・スーザンがマナリング氏を誘惑したことについても，ド・カーシィ氏はすっかり彼女の側に立った見解を持つに至っている。彼によれば，レディ・スーザンを中傷するチャールズ・スミスという人物がでっち上げた話が世間に広まり，彼女に災いしただけのことであるらしい。レディ・スーザンがマナリング嬢の恋人サー・ジェイムズ・マーティンを誘惑したことも，根も葉もない作り話だと，ド・カーシィ氏は一蹴する。マナリング嬢が結婚相手を探していることは，世間に既に知られた事実である。ただ単に，マナリング嬢よりも優れた女性，すなわちレディ・スーザンがサー・ジェイムズの目の前

に現れた。事実はただそれ以上でも，それ以下でもない。ド・カーシィ氏はこうした惑わされた考えを抱いている。サー・ジェイムズがレディ・スーザンに求婚した可能性を，ド・カーシィ氏は否定しない。レディ・スーザンのサー・ジェイムズへの恋の攻撃が功を奏したことは明白である。しかし，ド・カーシィ氏によれば，レディ・スーザンはそれを予見して，賢明にもラングフォードを後にしたということになってしまう。彼女がラングフォードを発った理由はマナリング嬢と彼女の母親からの攻撃に耐えかねたこと，またもっと価値のある恋の獲物であるド・カーシィ氏がチャーチルに来ていることを嗅ぎつけたからである。ド・カーシィ氏は自分が狙われていることさえわかっていないのだ。

ド・カーシィ氏の次の言葉は，笑いを誘うほどに馬鹿げたレディ・スーザンへの賛辞である。

> I know that Lady Susan in coming to Churchill was governed only by the most honourable and amiable intentions. Her prudence and economy are exemplary, her regard for Mr. Vernon even equal to *his* deserts, and her wish of obtaining my sister's good opinion merits a better return than it has received. (Letter 14, 227)

レディ・スーザンがヴァーノン氏の「デザート」にまで気を配っているとは，ド・カーシィ氏の無知ぶりを戯画化した台詞と言えよう。また，ヴァーノン夫人はもっとレディ・スーザンに「善意」を持つべきとは，ド・カーシィ氏がまともな判断能力を持っていないことを明かしている。

このように，レディ・スーザンはド・カーシィ氏を誘惑することで，ヴァーノン家への恨みを晴らしているのである。それは取りも直さず，レディ・スーザンがド・カーシィ氏を自由に操り，再び家父長的立場を得ることに繋がるのである。

5．フレデリカの出奔が持つ意味

レディ・スーザンのヴァーノン家への攻撃は，偶然の力によって頓挫する。娘フレデリカがロンドンのサマーズ先生の学校から出奔しようとしたのである。この計画は事前にわかってしまい，実現はしない。しかしながら，16歳になるこの娘は，重大な影響を『レディ・スーザン』のプロット展開にもたらす。それは彼女とド・カーシィ氏との恋愛である。この二人が愛し合うことは，レディ・スーザンにとって予期せぬ災いであった。彼女の計画は水泡に帰してしまうのである。

フレデリカは女・家父長への反旗を翻したと言える。母親の手先となってサー・ジェイムズのお相手になることは願い下げなのだ。レディ・スーザンは，娘のヴァーノン家的な意気地の無さがこの出奔の原因と考える。彼女によれば，娘はスタッフォードシャーの友人であるクラーク家（the Clarkes）に転がり込もうとしたということである。しかし，ヴァーノン氏によってロンドンで保護されたフレデリカは，レディ・スーザンにとって最悪の家にやって来る。それは取りも直さず，母親が滞在しているヴァーノン家の屋敷であった。どこか他所に遣っておけば安心であったが，フレデリカは運悪くド・カーシィ氏と出会ってしまうのである。もしも，フレデリカがド・カーシィ氏と恋に落ちたらどうなるか。これはレディ・スーザンが予想できなかった誤算であった。そして，これこそがレディ・スーザンが再び家父長的権力を手にすることを阻むのである。

レディ・スーザンにとってフレデリカは利用できる資産に過ぎなかった。いまだに彼女は娘をサー・ジェイムズに押しつけられると考えている。だが，利用する資産でしかないフレデリカは，感情豊かで勝ち気な女性だったのである。彼女の裏切りがレディ・スーザンを苦境に追い込むのである。ヴァーノン家で母親と娘が出会った様子を，ヴァーノン夫人は母親に宛ててこう書いている。

> Lady Susan who had been shedding tears before and showing great agitation at the idea of the meeting, received her with perfect self-command, and without betraying the least tenderness of spirit. She hardly spoke to her, and on Frederica's bursting into tears as soon as we were seated, took her out of the room and did not return for some time; when she did, her eyes looked very red, and she was as much agitated as before. We saw no more of her daughter. (Letter 17, 231-32)

ここでのレディ・スーザンの態度は，他家において毅然たる態度を取る，まるで父親のような振る舞いではないであろうか。そして，他家において出奔の理由を漏らさまいとして，娘を個人的に責める態度も，父親的である。しかも，最後に泣いたと思われる素振りをして帰ってくるのも計算高い。

これとは対照的に，面白いことに，ヴァーノン夫人はまるで母親のような態度をフレデリカに対して取る。次のヴァーノン夫人の観察眼は鋭くもあり，母親的な慈愛に満ちていると言わざるを得ない。少し長くなるが，引用しよう。

> I am more angry with her than ever since I have seen her daughter. The poor girl looks so unhappy that my heart aches for her. Lady Susan is surely too severe, because Frederica does not seem to have the sort of temper to make severity necessary. She looks perfectly timid, dejected, and penitent.
>
> She is very pretty, tho' not so handsome as her

Mother, nor at all like her. Her complexion is delicate, but neither so fair, nor so blooming as Lady Susan's, —and she has quite the Vernon cast of countenance, the oval face and mild dark eyes, and there is peculiar sweetness in her look when she speaks either to her Uncle or me, for as we behave kindly to her, we have of course engaged her gratitude. Her Mother has insinuated that her temper is intractable, but I never saw a face less indicative of any evil disposition than her's; and from what I now can see of the behaviour of each to the other, the invariable severity of Lady Susan, and the silent dejection of Frederica, I am led to believe as heretofore that the former has no real love for her daughter and has never done her justice, or treated her affectionately. (Letter 17, 232)

ここではヴァーノン夫人は，レディ・スーザンよりも遙かに母親らしい態度でフレデリカに接している。彼女はフレデリカに対して本当に「心を痛めている」のであり，レディ・スーザンが「厳しすぎる」ことにも気づいている。ヴァーノン夫人はフレデリカに同情し，かつ彼女がヴァーノン家の一員のような顔立ちをしていることに気づく。まるで父親に叱られた娘を癒やしてやるかのごとく，ヴァーノン夫人はフレデリカに接する。フレデリカが叔父と叔母に話しかけるとき，表情には「際立った美しさ」がある。愛くるしいフレデリカにヴァーノン夫人が愛情を感じていることは明らかであろう。そうするなかで，ヴァーノン夫人はレディ・スーザンが「本当の愛情」を娘に抱いていないことを感じ取る。

フレデリカはヴァーノン家に溶け込んでしまう。彼女は母親とは滅多に口を利かないが，ヴァーノン夫人とは親密に話を始める。彼女は本が好きで，内省的で，優しくて，人の世話が好きで，ヴァーノン家の小さな子供たちと仲良しになってしまう。彼女はもはやレディ・スーザンの娘ではなく，ヴァーノン夫人の娘になってしまったようだ。フレデリカによる母親の交換は，自然な娘の感情の発露を許すことになる。恋心が芽生え始めるのだ。サー・ジェイムズへの押しつけられた恋愛ではなく，自然な16歳の娘の恋心は，これまた年頃の男ド・カーシィ氏に対して向けられる。そして，彼女の恋心に気づくのもヴァーノン夫人なのである。ヴァーノン夫人の母親宛の書簡にはこうある。

I cannot help fancying that she is growing partial to my brother. I so very often see her eyes fixed on his face with a remarkable expression of pensive admiration! He is certainly very handsome—and yet more—there is an openness in his manner that must be highly prepossessing, and I am sure she feels it so. (Letter 18, 234)

そして，この自然な愛情の発露に手を貸してやるのもヴァーノン夫人なのである。

自然な愛情の発露とは反対に，娘にサー・ジェイムズとの婚姻を迫るのが，レディ・スーザンである。彼女の振る舞いは，性としては女であるが，完全に父親の，さらには家父長のそれである。そして，フレデリカにとって苦難の事件が起こる。サー・ジェイムズがヴァーノン家にやって来てしまうのだ。ヴァーノン夫人はフレデリカを，彼とレディ・スーザンから庇護してやろうとする。ド・カーシィ氏との恋も実らせてやろうとする。これらは，まるで母親の態度ではないであろうか。

ヴァーノン家に受け入れられたフレデリカは，ド・カーシィ氏に助けを求める書簡を渡す。これは恋心を抱く娘のラブレターではなかった。その書簡には，このような重要な一節が含まれている。

I am very miserable about Sir James Martin, and have no other way in the world of helping myself but by writing to you, for I am forbidden even speaking to my Uncle and Aunt on the subject; and this being the case, I am afraid my applying to you will appear no better than equivocation, and as if I attended only to the letter and not the spirit of Mamma's commands, but if *you* do not take my part, and persuade her to break it off, I shall be half-distracted, for I cannot bear him. No human Being but *you* could have any chance of prevailing with her. … I always disliked him [Sir James Martin] from the first, it is not a sudden fancy, I assure you, Sir, I always thought him silly and impertinent and disagreeable, and now he is grown worse than ever. I would rather work for my bread than marry him. (Letter 21, 240)

フレデリカにとって，ド・カーシィ氏はサー・ジェイムズとの縁談を破棄する唯一の頼りなのである。そして，叔父と叔母に，この件について話をすることは固く禁じられている。彼女はサー・ジェイムズと一緒にされるくらいなら，家を飛び出て自活の道を選ぶとまで言い放つ。彼女の必死の思いが，ド・カーシィ氏に通じないわけがないであろう。

レディ・スーザンがド・カーシィ氏に揮う魔力が解け始めるは，フレデリカからの書簡が来てからであった。確かにこの書簡によって，ド・カーシィ氏はフレデリカを救ってやらねばならないと，姉に相談するのである。同時にそれは，ド・カーシィ氏がフレデリカに恋心を抱き始めたことを明かすものであった。ド・カーシィ氏は直接，レディ・スーザンにフレデリカに対して進めている縁談に反対する。

このように，フレデリカの出奔はレディ・スーザンの持つ家父長的態度と，ヴァーノン夫人の持つ母親的心理をくっきりと浮かび上がらせる機能を果たす。同時に，ド・カーシィ氏をして，本当に自分に相応しい恋人に目覚めさせるのも，フレデリカの役割であったのである。

6．ド・カーシィ氏へのさらなる誘惑

フレデリカからの援助要請は，結果として，ド・カーシィ氏を我が身に相応しい相手に目覚めさせることになった。しかしながら，レディ・スーザンの家父長的振る舞いは，このくらいで収まるものではない。彼女は本格的にド・カーシィ氏を誘惑し，ほとんど彼と結婚する寸前まで行ってしまうのである。(11) 唯一，フレデリカにとって良かったのは，サー・ジェイムズを追い払うことに成功したくらいであった。

ド・カーシィ氏が直接，レディ・スーザンにフレデリカに対して勧めている縁談に反対を申し入れることは，先に述べた。レディ・スーザンはこの機会を利用し，さらに自分の魅力をド・カーシィ氏に売り込むのである。レディ・スーザンは，自分の娘がド・カーシィ氏にぞっこん惚れ込んでいることはわかっている。レディ・スーザンの本命は，相も変わらずマナリング氏である。したがって，彼女は単なる火遊びとしてド・カーシィ氏に手を出すのである。そして，我が娘を絶望の底に沈めることを何とも思わない。まさに，レディ・スーザンは，自分の欲望を充足させるためだけに行動する家父長的女性ではないであろうか。(12)

それに比べて，ヴァーノン夫人は母親に宛てた書簡でこう言う。

> ‘Frederica,’ said I, ‘you ought to have told *me* all your distresses. You would have found in me a friend always ready to assist you. Do you think that your Uncle and I should not have espoused your cause as warmly as my Brother?’ (Letter 24, 247)

これはまるで夫と一緒になって，フレデリカの保護に当たると宣言しているような文句である。レディ・スーザンとは対照的に，ヴァーノン夫人は母親的な振る舞いをフレデリカに対して見せる。

ド・カーシィ氏はあっという間にレディ・スーザンの魅力に参ってしまい，彼女の讃美者に変貌してしまう。

> ‘I find,’ he continued, his confusion increasing as he spoke, ‘that I have been acting with my usual foolish impetuosity. I have entirely misunderstood Lady Susan, and was on the point of leaving the house under a false impression of her conduct. There has been some very great mistake—we have been all mistaken I fancy. Frederica does not know her Mother—Lady Susan means nothing but her Good—but Frederica will not make a friend of her. Lady Susan therefore does not always know what will make her daughter happy. (Letter 24, 247)

あまりに唐突にド・カーシィ氏の態度が変わってしまうので，読者は戸惑いを覚えるしかないであろう。読者はヴァーノン夫人と一緒に，ただただ驚くしかないであろう。「レディ・スーザンは娘にとって良いことしか考えていない」とは，読者にド・カーシィ氏の判断力の甘さを痛感させるだけである。レディ・スーザンの公明正大さについては，直接本人に伺えばわかると言われたので，ヴァーノン夫人は早速，彼女に会ってみる。その場で，ヴァーノン夫人の耳に入ってきたのは，彼女のこんな言葉であった。

> I have now only to say further, that as I am convinced of Frederica’s having a reasonable dislike to Sir James, I shall instantly inform him that he must give up all hope of her. (Letter 24, 250)

確かに，レディ・スーザンはフレデリカをサー・ジェイムズの家に嫁がせることは諦めたと言っている。これと彼女が友人ジョンソン夫人に言っている台詞を比較してみよう。

> I believe I owe it to my Character, to complete the match between my daughter and Sir James, after having so long intended it. Let me know your opinion on this point. Flexibility of Mind, a Disposition easily biassed by others, is an attribute which you know I am not very desirous of obtaining; nor has Frederica any claim to the indulgence of her whims, at the expense of her Mother’s inclination. Her idle Love for Reginald, too; it is surely my duty to discourage such romantic nonsense. All things considered therefore, it seems encumbent on me to take her to town, and marry her immediately to Sir James. (Letter 25, 253-54)

これらを比較すると，レディ・スーザンがヴァーノン夫人に嘘をついていたことは明白である。フレデリカをサー・ジェイムズに嫁がせることを，レディ・スーザンはまったく諦めてはいない。

レディ・スーザンがこの縁談に執拗に拘る理由は簡単である。それは彼女の家父長的地位への志向性を満足させるためであった。レディ・スーザンがド・カーシィ氏を一時的に味見し，フレデリカは絶望してサー・ジェイムズとの婚姻を受け入れるとしよう。婚約してしまえば，フレデリカは母親の思う壺に填まってしまう。レディ・スーザンは火遊びを止め，お気に入りのマナリング氏と結婚すればよい。フレデリカはもうド・カーシィ氏の元に戻ることはできない。彼女の方でも自分を裏

切ったド・カーシィ氏を受け入れる気にはならないであろう。レディ・スーザンの言うことなら何でも受け入れるサー・ジェイムズが夫ならば，もうフレデリカは母親の言うことにはすべて従うしかない。レディ・スーザンは夫，娘の夫，娘を言いなりにする，女・家父長の位置に落ち着けるのである。

レディ・スーザンの娘への教育ぶりにしても，それはヴァーノン夫人に対して，このように語られていた。

> 'Frederica never does justice to herself; her manners are shy and childish. She is besides afraid of me; she scarcely loves me. During her poor Father's life she was a spoilt child; the severity which it has since been necessary for me to shew, has alienated her affection; neither has she any of that Brilliancy of Intellect, that Genius or Vigour of Mind which will force itself forward.' (Letter 24, 248)

これを見れば，レディ・スーザンが夫の地位を補完する人物として，娘の教育に当たっていることは明白ではないであろうか。フレデリカが「甘やかされた子」になったのは，明言はされていないが，夫が甘やかしたからであることが推察される。「それ以来〔夫の存命時〕，私が示さねばならなかった厳しさ」とは，レディ・スーザンが夫の代役として，娘の教育に厳しく当たったことを明かしている。そして，レディ・スーザンの規準で満足のいく「知性の輝き，才能あるいは活気溢れる精神力」を，フレデリカは示してこなかった。おそらく，レディ・スーザンのような精力的な女性は，自分の満足のいくレベルの知的能力を持つ女性を見出すことは難しいであろう。勢い，フレデリカが母親にとって活気のない，引っ込み思案の娘に見えたことは，容易に想像することができるであろう。

レディ・スーザンがド・カーシィ氏を娘から略奪したのは，自らの家父長的地位を確保するためであった。また，フレデリカ自身がレディ・スーザンには鈍重な娘に映り，そのため母親は厳しい家父長的立場から娘に教育を施したのである。そして，当然のことながら，レディ・スーザンは娘の結婚相手を決めることは，自らの家父長的立場に属する権利であると考えたのである。

7．決戦の地はロンドン―女・家父長の失墜

『レディ・スーザン』の最終場面はロンドンである。ここにヒロインをめぐる多くの登場人物たちが集まる。しかしながら，いわば体制派のド・カーシィ令夫人とヴァーノン夫人の書簡のやりとりは，最後の２通でのみ行われる。前者はパークランズ，後者はチャーチルの屋敷に留まっている。これら２通の書簡は，高らかに小説内の秩序の復興を告げる内容になっている。ヴァーノン夫人だけは，結びでロンドンを訪れていることが，三人称単数の形で語られている。

小説の大転換はジョンソン夫人がレディ・スーザンに宛てた書簡32において訪れる。発信地はロンドンのエドワード通り（Edward Street）である。ド・カーシィ氏はジョンソン夫人の居宅を訪問するが，ちょうどそのときマナリング夫人が訪問中であった。マナリング夫人は夫の行動に不安を覚え，ロンドンまで追いかけてきたのである。夫のマナリング氏は当然ながら，レディ・スーザンとの逢瀬を楽しむために，ロンドンに来ている。マナリング夫人が後見人のジョンソン氏に会うために，エドワード通りを訪れるのは当然のことである。夫人は夫がレディ・スーザンとの浮気に耽っているらしいとジョンソン氏に泣きつく。まさに，その場面にド・カーシィ氏は出くわしたのである。これはレディ・スーザンにとって，致命的な場面である。レディ・スーザンはド・カーシィ氏との恋仲を維持したままなのだから。ジョンソン氏自身が，ド・カーシィ氏はいずれレディ・スーザンと結婚するのではと疑っていた。事の次第すべてが，関係者にばれてしまった。ジョンソン氏はド・カーシィ氏の話に納得し，ド・カーシィ氏はレディ・スーザンの偽善ぶりに気づき，マナリング夫人は愕然とする。(13) ジョンソン夫人ができることは，もしマナリング氏と一緒にいるのならさっさと別れろと，レディ・スーザンに書き送るだけであった。

彼ら３人の邂逅は，マナリング夫妻の離婚とド・カーシィ氏とレディ・スーザンの関係解消をもたらす。前者は，ジョンソン夫人がレディ・スーザンに宛てた書簡38で，軽く触れられるだけである。後者は書簡34から書簡37にかけて，ド・カーシィ氏とレディ・スーザンの文通によって明らかにされる。ド・カーシィ氏はレディ・スーザンの誘惑を頑として撥ねつけ，今度ばかりは心変わりをすることはない。

女・家父長然としたレディ・スーザンの態度は書簡体の部分では健在である。レディ・スーザンがアッパー・シーモア通り（Upper Seymour Street）でジョンソン夫人宛に認めた書簡39にはこうある。

> Mainwaring is more devoted to me than ever; and were he at liberty, I doubt if I could resist even Matrimony offered by *him*. This Event, if his wife live with you, it may be in your power to hasten. The violence of her feelings, which must wear her out, may be easily kept in irritation. I rely on your friendship for this. I am now satisfied that I never could have brought myself to marry Reginald; and am equally determined that Frederica never *shall*. To-morrow I shall fetch her from Churchill, and let Maria Mainwaring tremble for the consequence.

Frederica shall be Sir James's wife before she quits my house. *She* may whimper, and the Vernons may storm; I regard them not. (Letter 39, 267)

ここでのレディ・スーザンは，まるで暴君ではないであろうか。彼女はド・カーシィ氏と結婚する気はなく，フレデリカとド・カーシィ氏の結婚は許可せず，娘を自分の手許に置いておこうとする。マナリング嬢はその結果（つまり，フレデリカがサー・ジェイムズの妻にさせられる可能性が発生すること）に震え上がる。フレデリカは絶対にサー・ジェイムズの嫁にしてみせる。彼女が啜り泣こうが，ヴァーノン家の面々が憤慨しようが，知ったことではない。書簡体の部分では，レディ・スーザンは元気溌剌としている。

ところが，レディ・スーザンは語りの部分では，女・家父長の地位から失墜してしまう。面白いのは，先の引用で彼女がマナリング氏と結婚しても構わないと仄めかしている部分である。意外なのは「彼から提供された婚姻」という言葉である。レディ・スーザンならば，マナリング氏を誘惑し，求婚させる程度のことは簡単にできそうである。しかし，そうする気配はない。もちろん，彼女がマナリング氏と結婚すると，別れたマナリング夫人は怒り狂うであろう。後見人のジョンソン氏の許に彼女は押しかけてくるはずであり，ジョンソン夫人にも，彼女がレディ・スーザンの親友であるがゆえに，何らかの迷惑がかかるかもしれない。しかし，レディ・スーザンの暴君ぶりからして，これくらいのことは心理的制約になろうとは思えない。

語りの部分では，レディ・スーザンは3週間後，サー・ジェイムズと結婚したことになっている。フレデリカは偶然にインフルエンザの蔓延のためにロンドンを離れ，ヴァーノン夫妻によってチャーチルの屋敷に閉じ込められている。娘はレディ・スーザンの手から離れ，チャーチル夫妻の管理下に置かれている。彼女をヴァーノン夫妻から取り戻し，サー・ジェイムズに嫁がせることはもはや無理そうであると，レディ・スーザンは悟らなかったであろうか。娘をサー・ジェイムズに嫁がせて，彼を金蔓とする算段はもう成り立たない。お気に入りのマナリング氏と結婚するとしても，いざ金銭的先行きの不安がレディ・スーザンの脳裏をよぎらなかったであろうか。経済的不安を取り除く方法は簡単である。単に，レディ・スーザン自身がサー・ジェイムズと結婚すればよいだけのことである。オースティンは語り手にそうは言わせていないのだけれども，レディ・スーザンは経済的算段のゆえに，サー・ジェイムズとの結婚を受け入れたと言えるのだと思う。つまり，レディ・スーザンは女・家父長から資産家の妻へと失墜してしまったのである。

8．結語

なぜオースティンは「結び」という三人称単数の語りの形式を採用し，『レディ・スーザン』を締めくくったのであろうか。(14) この小説が作家の若かりし頃の作品であり，書簡体という多面的な視点から筋書きを浮かび上がらせる手法を最後まで押し通すことができなかったのかもしれない。(15) しかし，この考えは憶測の域を出ない。

最後の部分だけ三人称単数の語りにした理由は，作品の内容面から考察せねばならない。「結び」で最も興味深いのは，レディ・スーザンがあっさりサー・ジェイムズと結婚したことである。さらに，その結果として，フレデリカがド・カーシィ氏といずれ結婚して，ヴァーノン家の一員に取り込まれてしまう可能性を含んだ終わり方にしている点である。

オースティンがレディ・スーザンのキャラクターに一貫性を持たせようとするのであれば，この女ピカロの悪漢性を維持し，彼女をマナリングと結婚させるのが望ましいであろう。レディ・スーザンは，自身の悪漢性を小説の最後においても放棄したわけではない。ヴァーノン夫人から母親に宛てた書簡41において，レディ・スーザンはド・カーシィ氏との関係がまだ続いているような印象をヴァーノン家の面々に与えようとしている。

My surprize is the greater because on Wednesday, the very day of his [Reginald's] coming to Parklands, we had a most unexpected and unwelcome visit from Lady Susan, looking all cheerfulness and good-humour, and seeming more as if she were to marry him when she got to Town than as if parted from him for ever. (Letter 41, 268)

このような女ピカロのプライドを維持する心意気があるのならば，是非ともレディ・スーザンは悪女ぶりを貫き，マナリング氏と結婚するのが相応しいと言えよう。

だが，オースティンは最後にはレディ・スーザンを一介の資産家の妻に貶めてしまった。ということは，彼女はレディ・スーザンが女・家父長から資産家の妻に墜落するさまを，書簡体における登場人物たちの生き生きとした言葉のやりとりの中で描きたくなかったことになる。そうではなく，三人称単数で起こったことを単に報告する形で，彼女は小説を終えたかったのだ。こうすることによって，彼女はレディ・スーザンの女・家父長性を維持するために，際限もなく彼女に悪事を続けさせるのを避けることができた。しかも，レディ・スーザンが金銭のためにサー・ジェイムズと結婚する際の，哀れな落ち込みぶりの内面を描き出す必要もなくなった。悪女レディ・スーザンが跳梁跋扈して，男を手玉に取る作品の醍醐味を殺ぐことになる，彼女の内面の吐露もなしで

済ますことができたのである。

では，なぜこの小説は全体を三人称単数の語りの形式に書き改められなかったのであろうか。これも，作品の内容に即して考える方がよいであろう。もし，この小説を三人称単数の語りの作品とするのならば，やはりレディ・スーザン対ヴァーノン夫人という，悪漢性対善良性，父性対母性といった対立構造が必要となるであろう。しかしながら，ヴァーノン夫人はレディ・スーザンからの攻撃に対し，ヴァーノン家を守るという受動的立場に常に留まっている。ヴァーノン夫人の側の積極的行動性があまりに弱すぎるのである。このために，三人称単数の語りの作品にするには，対立軸が鮮明になりにくくなってしまう。

さらには，作品展開の結節点になるのが，ロンドンのジョンソン氏の居宅におけるド・カーシィ氏とマナリング夫人の邂逅なのである。レディ・スーザン対ヴァーノン夫人の対立軸が明快な両者のせめぎ合いではないのだ。こうしてみれば，『レディ・スーザン』を三人称単数の語りの作品とするのは，かえって直接的な言葉が飛び交う書簡体の生命力を奪うことになってしまうであろう。[16]

ところで，『レディ・スーザン』の最も魅力的な点は何であろうか。それは女ピカロたるレディ・スーザンが独善性を貫き，男性中心社会を好き放題に渡り歩くことにある。彼女はマナリング家もヴァーノン家も，女・家父長然として，自らの支配の下に置こうとする。しかも，レディ・スーザンは子連れのうら若い，経済的な基盤も持たない女性であり，普通ならば上・中流社会においては最も寄る辺ない存在なのである。最も弱々しい立場にあるはずのレディ・スーザンが，美貌と才知のみを武器にして，男たちを従えて社会に君臨する。彼女は家父長の「まねび」を行う。この逆説的な面白みは，性が逆転しているとはいえ，家父長制の恐ろしさへの糾弾ともなっているのではないであろうか。

『レディ・スーザン』の矛盾した世界の諸要素，たとえば主要な男性登場人物たち―ヴァーノン氏やジョンソン氏―が実質的に何もしないことは，逆転された家父長制の提示に貢献しているように思える。ヴァーノン氏は通常の社会関係に照らして，レディ・スーザンを保護する立場にある。未亡人になった義理の姉，しかも居宅であるヴァーノン城を手放す経済上の必要に見舞われ，娘のフレデリカの養育と教育の義務も負った姉には，ヴァーノン氏が何らかの援助の義務を負うであろう。しかしながら，ヴァーノン氏は彼女を保護しないし，逆にヴァーノン城を購入することを断られている。

ジョンソン氏はマナリング氏と浮気するレディ・スーザンに，何の注意も指導も処罰も行わない。彼はマナリング夫人の後見人であり，夫を寝取られようとしている夫人は後見人に相談するのが通常の処置ではないであろうか。ジョンソン氏は苦悩するマナリング夫人の身を案じ，助けてやる立場にあるはずだ。しかしながら，レディ・スーザンのマナリング氏との逢瀬が最終的に明白になるまで，彼が何らかの対策を打った形跡はない。言うことを聞かない夫を目の前にして，マナリング夫人が後見人に助けを求めるのは通常のことではないであろうか。

こういった男たちの無行動ぶりを背景にして，未亡人で金銭的にも豊かではないレディ・スーザンが，美貌と頭脳だけを頼りに，好き放題に世間を渡り，周りに混乱をもたらしている。この矛盾した世界の要素は，結局は作品自体が矛盾した構造に依拠して成り立っているがゆえに起こっているのではないであろうか。つまり，弱者たる女が強者たる男の支配構造―家父長制―の主導者となり，女主人公自身がピカロ的振る舞いを重ねることによって，女・家父長となっているのだ。

『レディ・スーザン』が「結び」を除いて書簡体小説であり続けたことは，オースティンの小説に見られる通常の対照構造―レディ・スーザン対ヴァーノン夫人の対立―があまりに脆弱であることに起因している。この構造的脆弱性は，オースティン得意の教訓性の提示を無効にしている。レディ・スーザンの生き方はオースティンにとって，さしたる非難の対象になってはいない。「結び」が通常の三人称単数の語りであることによって，かえってレディ・スーザンの哀れな―少なくとも彼女の意に反した―サー・ジェイムズの妻にならざるを得なかった人生選択は赤裸々に描かれずに済んでいる。したがって，彼女は種々の悪行によっても，懲罰を受けているとは言いがたい。ヴァーノン夫人の行動もレディ・スーザンの攻撃に対して防御的であり続け，彼女が積極的なモラルの具現者となっているとも言いがたい。よって，『レディ・スーザン』はそもそも，モラルを教える小説であることを拒否しているのである。

『レディ・スーザン』については，性差が逆転した家父長制が生み出した矛盾した世界を楽しみつつ，その混乱状態が種々の登場人物にもたらす影響に一喜一憂することを読者に求める小説と言うことが正しいであろう。そして，オースティンは最終的に語りの形式を転換することによって，この混乱状態の「嵐」を閉じ込めることに成功したのである。

注

（1）*Lady Susan*と18世紀の書簡体小説との関連はRoger Gard, *Jane Austen's Novels: The Art of Clarity*（New Haven: Yale UP, 1992）25-44を参照

（2）Lady Susanの書簡体小説としての分析はLloyd W. Brown, *Bits of Irony: Narrative Techniques in Jane Austen's Fiction*（Baton Rouge: Louisiana UP, 1973）145-55を参照。

（3）Austenは直線的語りの方が書簡体よりも遙かに容易に読者の注意力を引きつけられると気づいたに違いないという解釈はMary Waldron, *Jane Austen and the Fiction of Her Time*（Cambridge: Cambridge UP, 1999）25を参照。

（4）Lady SusanをAustenの作品中で最も情け容赦のない攻撃的人物とする分析はBernard J. Paris, *Character and Conflict in Jane Austen's Novels: A Psychological Approach*（Detroit: Wayne State UP, 1978）177-80を参照。

（5）Alistair M. Duckworth, "Austen's Accommodations," *Critical Essays on Jane Austen,* ed. Laura Mooneyham White（New York: G. K. Hall, 1998）160-97 [173]はLady Susanをまったく道徳感を欠く猛禽類的女性と論じている。

（6）テキストはJane Austen, *Northanger Abbey, Lady Susan, The Watsons and Sanditon*, ed. John Davie, the World's Classics Ser.（Oxford: Oxford UP, 1980）による。

（7）家父長及び家父長制についてはLawrence Stone, *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800*（Harmondsworth: Penguin, 1979）が詳しい。

（8）*Lady Susan*を性役割が逆転された物語とする見解は*Jan Fergus, Jan Austen: A Literary Life*（London: Macmillan, 1991）72-74 [72]を参照。

（9）Lady Susanは金銭よりも，男たちの間で好き勝手に振る舞う自由を求めているという解釈はKeith C. Odom, *Jane Austen: Rebel of Time and Place*（Arlington: Liberal Arts Press, 1991）45-49 [47]を参照。

（10）Lady SusanによるReginald de Courcyへの誘惑は，*Mansfield Park*におけるMary CrawfordによるEdmundへのそれのプロトタイプとなっている分析はRobert Liddell, *The Novels of Jane Austen*（London: Longmans, 1963）57-58を参照。

（11）Lady SusanがReginald De Courcyを誘惑する過程の分析はOliver MacDonagh, *Jane Austen: Real and Imagined Worlds*（New Haven, Yale UP, 1991）21-28を参照。

（12）Lady Susanが攻撃的エネルギーを行使する権力を望みつつも，品の良さも保ちたいという矛盾する欲望を持っていることはMary Poovey, *The Proper Lady and the Woman Writer: Ideology as Style in the Works of Mary Wollstonecraft, Mary Shelley, and Jane Austen*（Chicago: U of Chicago P, 1984）175-76を参照。

（13）Lady Susanの偽善ぶりが，彼女の外見と内的感情の対立を含んでいるとする分析はA. Walton Litz, *Jane Austen: A Study of Her Artistic Development*（London: Chatto and Windus, 1965）42-43を参照。

（14）この「結び」をAustenが読者に宛てた「添え状」（a covering letter）とする見解はDarrel Mansell, *The Novels of Jane Austen: An Interpretation*（Lon-don: Macmillan, 1973）27を参照。

（15）*Lady Susan*は初期作品群（juvenilia）に属する書簡体小説であるとはいえ，P. J. M. Scottはとても初期作品とは思えず，成熟した重要作品であると見なしている。この件はP. J. M. Scott, *Jane Austen: A Reassessment*（Totowa, NJ: Barnes & Noble Books, 1982）9-23を参照。

（16）書簡体小説が読者に直接的に語りかける形式については，Deborah Kaplan, *Jane Austen among Women*（Baltimore: John Hopkins UP, 1992）166-70を参照。

平成29年5月8日受付，平成29年6月16日受理